

『落花 思新豊老翁』 - A章風

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

※一部の漢字はJISコードにないため、画像を用いて表示している部分があります。

唐の憲宗の治世、元和の初めの話である。

一人の翁がふらりと新豊の村に現れた。

新豊とは長安より東に向かった驪山の麓——玄宗と貴妃の悲劇で名高い華清宮のある辺りといえば分かるであろうか——にある村の名である。

さて、その翁であるが、まさに幣衣蓬髪。眉も髭もまるで雪のよう。着ている粗衣にいたっては汚れ過ぎて元の色すら分からない有様であった。

何よりも里人の眼目を集めたのは風がごうと吹く度、ひらひらと舞い踊る翁の右袖であった。翁の右腕は丁度肱から先が無かったのだ。

この翁、何を思ったのか、村にやって来るとそのまま村外れの荒屋に住み着いてしまった。

初めのうちは里人も、

「なあに、暫くすれば出ていくであろうよ」

などと言って気にも留めなかったが、一月経っても、二月経っても、翁は一向に出ていく気配を見せない。

流石に里人も段々と薄気味悪くなってきた。然りとて、あの外貌である。怖くて誰も出ていけとは言いに行けない。結局、皆で顔を突き合わせ、

「困った事だ」

と、言い合うだけであった。

そんなうちに更に一月が過ぎた。季節はそう、丁度、花の咲く頃である。

ある壮年の男が新豊の村を通り掛かった。

楽天

そう名乗ったこの男、若い頃より俊才の誉れが高く、科挙や吏部の試験にも優れた成績で合格した程の人物であった。その後暫くは秘書省校書郎という賤吏に甘んじていたが、この年晴れて長安に近い県の地方官となったばかりである。

この男が何ゆえ新豊を通り掛かったのかは分からない。生まれが下邳^{トウ}というから、もしかすると其処へ任官の報告に行く途中であったのかもしれない。

「その男に頼んでみたらどうだろう」

里人の誰かがそう言い出した。

件の翁の事は皆内心困っていたので、

「おお、それが良い」

と言い、連れ立って楽天の所へ、翁に村を出るように話してきてもらえぬか、と頼みに行った。

楽天は連れ立って現れた里人に、初めこそ何事かと身構えたが、生来好奇心の強い男である。話を聞くうち、一度その翁に会ってみたくなってきた。

「宜しい。私が話をしてきて差し上げましょう」

楽天のその言葉を聞くと里人は皆で喜びあった。

里人の言によれば、翁の住み着いた荒屋は村の東外れ、数十年以上も前に最後の家人が亡くなって以来住む者も無く荒れ放題になっていた家だと言う。

「ここから少し行くと櫻の樹が見えてくるはず。後はその櫻へ向かって行けば良い。樹の生えている所がその家だ」

楽天は里人の言葉を思い出しながら、改めて眼前の光景に目をやった。

「これは……」

楽天がそう漏らしたのも無理はない。それ程眼前に見える櫻の樹は美しかった。高さは二、三十尺程か、枝は天を覆い、風に舞い散る花弁は地を覆う。

「これ程美しい櫻の樹は未だかつて見た事がない」

落花の雪に導かれるように楽天は緩る緩ると櫻の樹へと近付いていった。

樹下に立ち、花を仰ぎ見た楽天は、

——花神も己が身を恥じるのではあるまいか？

そんな思いを抱いた。

花神とは牡丹の別称である。牡丹は唐代、最も高貴とされた花であった。その牡丹が、己が身を恥じる、と言うのであるから、楽天のこの櫻に対する評が分かるというものであろう。

はらり、はらりと舞い散る白い花卉の下、楽天は時の経つのも、ここへやって来た目的も何もかも忘れ、ただただ花を見続けていた。

どれ程そうしていたであろうか、楽天は後ろに人の気を感じた。慌てて振り返るとそこには一人の老翁が立っていた。

——この人物が件の翁であるか。

見れば、里人の言うとおり、右の脇より先は無く、蓬頭幣衣といった外貌である。しかし、よく見てみれば、この老翁、齡の割に体は締まり、どこか敏を秘めた雰囲気をもっている。

——武芸でもしているのか。

そう思った楽天は慇懃に頭を垂れ、

「この家に住む翁とは貴方の事ですか」

と、丁寧に話しかけてみた。老翁は応えて

「いかにも、その通りだが、貴方様のような方が、わしのごとき老人にいかなるご用ですか」

楽天の顔をじいと凝視したままそう述べた。

楽天はその声を聞くと、

——未だ威あり。

そう思った。

その声には世の深奥を見、艱難辛苦を味わった者のみかもつなんと形容し難い迫りに満ちていた。

しかし、楽天はその威の中に深い翳がある事に気が付いた。その翳が一体何であるか、それは流石の楽天にも分からない。

——一体どのような人生を送ってきた人物であろうか。

そのような思いが胸中を去来し、詳しく聞かずにはおれなくなってしまった。

「失礼ながらお尋ねしたい。その右腕はどうなされた」

なんとか会話の糸口を掴もうと楽天はそんな問いをしてみた。

老翁は暫く楽天の顔を凝視したままであったが、やがて視線を落とし、

「長くなりましょう。家にお上がりなさい」

と、だけ言い、家へ向かって無言で歩き始めた。

楽天も黙って老翁に付いていく。

道中、一度だけ翁が楽天の方を振り返った。

その先では櫻の樹が風にその身を震わせ、ただ、佇むのみである。

「こんな荒屋ですが、どうぞ上がってください」

老翁のそんな言葉に促され、楽天が案内された家は確かにすっかり荒れ果てていた。かつてはさぞかし多くの者が寝起きしていたであろうその大きな家は今や野鼠が駆け回り、すっかり鼠矢に塗れてしまっていた。

頭上の羽音に驚いた楽天が天を上げば今しも雉が梁上より飛び立つところであった。

庭に目を転じれば稗が伸び育ち、地すら見えず、井戸に目を転じれば**苺**菜が群れ生え、水すら見えない。

——何もこの様な荒屋に居座る事もあるまいに。

楽天がそのような思いを抱いていると、奥より
「食事はもうお済みかな」
と、老翁の声がする。
言われてみればなにやら腹が空いていた。
「まだ、済ませておりませぬが」
「それは丁度よい。実はわしもこれから食事でな。大した物は出せぬが良ければご一緒なさらぬか」
流石に楽天も気が引け、丁重に断ろうとしたのだが、
「見ての通りの一人住まいで最近は箸を共にする者も居ないのです。この古い毫れの為と思って是非召し上がってください」
と、翁に言われては断る術もない。
「かたじけない」
結局、楽天も食事をさせて貰う事となり、座敷に上がり翁がやって来るのを待っていた。見渡すと荒れ果てた室内に古ぼけた瑟があるのに気が付いた。楽天はなにやらすっきりせぬものを感じた。
——はて、何であろうか。
と、必死で考えたが何であるのかさっぱり分らない。そうこうしている内、奥より老翁が現れた。
老翁は苦勞しながらも左腕一つで食事の準備を終えると、
「さ、召し上がれ」
と、楽天に告げ。己はさっさと食事を始めた。
食事は稗の飯と**苺**菜を使った羹であった。

「さて、どこからお話をしたのか」
片腕での作業に難儀しながらようやく食事を終えた老翁は居住まいを正し、楽天にそう語り始めた。
「わしは今年で八十八歳。生まれたのは開元の頃、そうまだ世に戦などなく、大いに栄えた御世の事だ」
開元年間は元和より溯る事六十年以上、かの玄宗の治世初め三十年を指し、世に「開元の治」と謳われる繁栄がもたらされた時代である。
——それ程の歳であったか。
楽天がそう思ったのも無理はない。杜甫が曲江詩で「人生七十古来稀」と詠んだ時代の事である、この八十八歳と言う年齢はこの時代では並外れて高齢である。
「今はとてもそうは見えぬであろうが、これでも若い頃は礼楽に親しみ、弓箭については何一つ知らずに育った。当時は良くあの櫻の下に座り琴や瑟を引き遊んだものよ」
翁は遠い昔を懐かしむようにそう言った。楽天はその言葉にもしやと思い、老翁に尋ねてみた。
「御老、よもや御身はこの新豊のお生まれか」
それを聞いた老翁は、さも当然といった様子で、
「いかにも、わしは新豊の生まれ。今、貴方が居られるこの家で生まれ育った者である」
と、応えたではないか。
驚いた楽天がおもわず、
「なんと」
と、叫ぶとそれを聞いた老翁は尋ねて言った。
「何をそれ程驚かれる」
仕方ないので楽天は、自分が新豊の里人から老翁にこの村を出ていくよう言ってきた貰えないかと頼まれた事を話した。
話を聞いた老翁は天を仰ぎ長嘆した。
「もはや、郷里でわしの事を覚えているものはあの櫻だけになってしまったか。い

や、それも仕方あるまい。わしが此処を出てより六十余年。あまりに時が流れ過ぎた」

老翁はそう言って悲しそうに笑った。

その様に楽天はかける言葉も思い至らなかった。

「客人、これであなたの用はもう済んだわけだが、この古い毫れの身の上話をもう少し聞いて下され」

暫しの沈黙の後、老翁はそう言ってまた己の事について語りだした。

「天宝になった頃から世も乱れ始め、一家に一人は兵に取られていくようになった。話聞く所によれば万里も離れた雲南へ連れて行かれると言う。一度連れて行かれれば万に一つも戻っては来れまいと、皆、家族と涙を零して別れを惜しんだものだ。

二十四の時、とうとうわしも兵に取られ、雲南へ行く事となった。父母、妻子に、必ず帰る、と別れを告げ、慣れた琴瑟を慣れぬ旗槍に持ち替え、吏に連れられて村を出る。最後に村を振り返れば、家族が櫻の下でわしを見送っていた」

その時の事を思い出したのであろうか老翁はそこで話を切り、外を眺めた。

外では櫻の花弁がその日と変わらず風に舞っている。

「雲南へ着くまでに兵の十の内二、三が死んだ。車の軋む音と馬の嘶きを友としてその地で戦う事十余年、脳裏に浮かぶのは故郷の櫻。腰の弓箭を重いとも思わなくなった頃、ようやく郷里に帰れる事となり北へ戻る。

丁度洛陽の辺りまで戻った時だった。幽州より謀反の報せが届いた。賊軍の勢いは激しく、わしの居た洛陽もあつという間に賊軍の手に落ちてしまった。城の周囲は兵の屍で満ち溢れ、その肉を狙う烏どもで空は埋め尽くされた。せせらぎと主を失いさまよう馬の嘶きだけが死者を悼むかのようであった」

楽天は息を呑み、老翁が静かに語る凄惨な話に聞き入る。老翁は続けて話し出した。

「賊軍は防ぎ難く、ついに天子は西南へ。傾国と謳われた麗人も消える。わしは太子亨に従い靈武に逃れた。太子亨は靈武にて立ち、肅宗となる。

崑崙に落ちる月の光の下、風に乗って響く回鶻の歌は否応なく不安を増した。

それより、郷里の情景、家族の姿を心に描き、いつの日か郷土に帰る事のみを頼りに天子に従い戦する事九年。賊軍を追い、河南一帯を廻った。広徳の元年にようやく賊軍を撃つ事ができたが、今度は西より吐蕃が現れ長安を攻める。帰郷の望みは水泡に帰し、西へ征く。

この頃になるとあれ程、慣れ親しんだ琴瑟の感触も思い出せなくなり、旗槍弓箭の感触しか分からなくなってしまった。

その後も天子の命で北へ東へと戦して廻る。多くの兵が血の海に消え、天子が幾代も変わったが、いつまで経っても帰郷の許しはおりない。いつしか齢は八十を越え、最早、心中の望郷の念を押さえ切れなくなった。

ある晩、陣をこっそりと抜け出した。誰も居らぬ辺りまで行ってから意を決し、刀を引き抜く。刃を右腕に押し当て、そのままじりじりと腕を斬った。途中、筋が切れ骨に刃が当たる度痛みの余り気を失いかけたが、これで故郷に帰れると思えばどうという事はなかった」

老翁は肱より先のない右腕を、残った腕で摩りながらそう言った。いつの間にか日は落ち、白い月明りのみが頼りなげに楽天と老翁を照らしている。

「腕がなくては戦はできぬ。こうしてわしはやつと郷里に帰る事を許された。道中、風雨や寒さに傷は痛み眠る事すらできない。

だがな、客人。わしはそんな痛みなどどうと言う事無いのだよ。あのまま故郷に帰る事も許されず、野に死す事に比べたら、このくらいの苦痛がなんだと言うのか。

客人、誓って言おう。わしはあの時この腕を切り落とした事は後悔しておらん」

楽天は問うて言った。

「ならば御老、何ゆえ落涙されるか」

老翁の両の眼からははらはらと涙が零れ落ちていた。

「ただ後悔する事が二つある。

故郷に立ち帰り懐かしい我が家を見ればすっかり荒れ果て、待つものは櫻以外

に誰も居らず、庭に墓石が並ぶのみであった。

何故もっと早くこうしていなかったのか。家族が待つ間にこうしていなかったのか。こればかりは悔やまれてならない。

今一つは一人瑟を弾き、櫻を眺め心慰めようと思っても、わしにはもう弾く為の腕が無いという事。

客人、この古い耄れの話に少しでも感ずるところがあるのならば、どうか、わしの為に瑟を鼓してくれないだろうか」

楽天は先程室内の瑟を見た時に覚えた違和感がなんであったのかようやく思い至った。

瑟とは左腕と膝で固定し、右手で弾く楽器である。隻腕の老翁に弾く事はできない。

「分かりました」

そうとだけ言って楽天は瑟を爪弾き一首、詩を吟じた。

十五従軍征	十五にして軍に従いて征き
八十始得帰	八十にして始めて帰るを得たり
道逢郷里人	道で郷里の人に逢う
家中有阿誰	家中に阿誰か有りや
遥望是君家	遥かに望むは是れ君が家
松柏冢 累累	松柏の冢 累累 たり
兔從狗竇入	兔狗竇より入り
雉從梁上飛	雉梁上より飛ぶ
中庭生旅穀	中庭には旅穀生じ
井上生旅葵	井上には旅葵生ず
烹穀持作飯	穀を烹て持って飯を作り
採葵持作羹	葵を採って持って羹を作る
羹飯一時熟	羹と飯は一時に熟すれども
不知貽阿誰	阿誰に貽らんかを知らず
出門東向望	門を出でて東に向かつて望めば
淚落沾我衣	淚落ちて我が衣を沾す

辺りに瑟の音と楽天の声のみが響く。

老翁はそれを聞き、涙を滂沱と流した。涙に視界は霞み、落花すら良く見えない。やがて曲は終り、辺りは静寂に支配された。楽天が辞した後も老翁は涙で霞む櫻の樹を眺め続けていたという。

その後、楽天は官吏として出世を遂げ、要職を歴任する一方、詩人としても名を成した。「白氏文集」として今も伝わる彼の詩は社会や政治に対する憤りと批判に満ちている。

一方、老翁がその後どうなったのかは誰も知らない。あの翌日、里人が老翁の様子を見に行くとすでに家には誰も居なかったという。

薄倖の老翁の行く先を知るのはただ櫻のみであるかもしれない。

唐の憲宗の治世、元和の初め。

落花の頃の話である。

[戻る](#)